

最終回

シリーズ

昭和の歌人たち

日本の歌謡史を彩った作家達

～第36回 古賀政男～

(1月20日 福生市民会館)

JASRAC主催
EIVIEINIT

戦後の復興や高度経済成長を遂げた「昭和」。この激動の時代に、日本の音楽史に大きな足跡を残した作家に焦点をあて、時代背景とともにその作品と人物像を紹介するシリーズ。

今回取り上げたのは、戦前から戦中・戦後と長きにわたり数多くのヒット曲を手がけた、日本歌謡史に燦然と輝く作曲家・古賀政男氏。「古賀メロディー」と呼ばれ親しまれる名曲の数々を紹介した。

【出演】 五木ひろし、大川栄策、キム・ヨンジャ
小林幸子、椎名佐千子、氷川きよし
三山ひろし (五十音順)

【ゲスト】 アントニオ古賀

【演奏】 栗田信生とJ'sバンド

【司会】 由紀さおり、石澤典夫

幼くして父を亡くした古賀氏は、生まれ故郷の福岡県三潴郡田口村(現・大川市)を離れ、兄の暮らす仁川(現在の韓国・仁川広域市)に移り住む。その頃に大正琴とマンドリンを手にしたことから音楽の道を志すようになる。

五木ひろしさんは「原点は福岡にある。3拍子の曲が多く、メジャー(長調)の曲でも1か所だけマイナー(短調)になる」と、古賀メロディーの特徴を解説した。



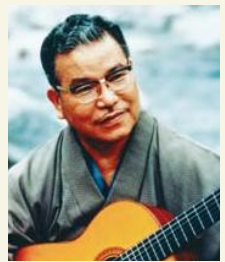
コンサートは、『誰か故郷を想わざる』で幕を開けた後、『サーカスの唄』、『悲しき竹笛』、『東京ラブソディ』などの初期の名曲を、氷川きよしさん、キム・ヨンジャさん、由紀さおりさんらが熱唱した。

古賀氏は、生涯で4,000を超える作品を手がけたが、その作風はしみじみとしたものから、明るく楽しいものまで幅広かった。コミックソングの原型ともいえる『うちの女房にゃ髭がある』が、大川栄策さんと小林幸子さんとの豪華デュエットで披露されたほか、椎名佐千子さんが『トンコ節』を、三山ひろしさんが『青春サイクリング』をそれぞれ朗らかに歌い上げた。

今回のゲストは、古賀氏の弟子であるギタリストのアントニオ古賀さん。兄弟弟子の大川さんと古賀氏の思い出を語っていただいたほか、五木さんとのギター弾き語り『酒は涙か溜息か』、『湯の町エレジー』、『影を慕いて』をしっとりと聴かせた。

古賀政男氏略歴

1904(明治37)年生まれ。明治大学在学中に「明治大学マンドリン倶楽部」の創設に携わる。在学中に、マンドリン倶楽部の定期演奏会で『影を慕いて』発表。その後『人生の並木路』、『無法松の一生』、『悲しい酒』など数々のヒット曲を生み出す。1958(昭和33)年に日本作曲家協会を立ち上げ、初代会長に就任。日本レコード大賞を制定するなど、音楽界の発展に尽力。1965(昭和40)年『柔』で第7回レコード大賞・大賞受賞。1974(昭和49)年JASRAC会長就任。1978(昭和53)年没。没後、国民栄誉賞受賞。



戦前・戦後を通じ、昭和という時代を映し続けてきた古賀メロディー。最後に、会場全員で名曲『丘を越えて』を歌い、「昭和の歌人たち」最終回を華やかに締めくくった。



五木ひろしさん



大川栄策さん



キム・ヨンジャさん



小林幸子さん



椎名佐千子さん



氷川きよしさん



三山ひろしさん

※新企画「こころの歌人たち」は今秋スタート予定。ご期待ください！ P11に「昭和の歌人たち」の過去開催一覧を掲載しています。